核兵器の使用は正しい戦争か

核戦争は今日、道徳的に受け入れられないし、将来にわたってもそうであり続けるだろう。その名誉回復などありはしない。それが受け入れ難いのだから、われわれはそれを防ぐために別の方法を探さなくてはならないし、抑止は悪い方法なのだからわれわれは他の方法を探さなくてはならない。（ウォルツァー 2008b：515-6）

1　はじめに

広島、長崎に原子爆弾が投下された1945年8月から78度目の夏を迎えようとしている。それ以来、日本は「唯一の被爆国」として国際社会に核兵器がもたらす悲惨さを訴え続けてきた。ただ戦争自体は第二次世界大戦後も度々行われており、今現在もロシアとウクライナは交戦を続けている。人々はロシアによる侵略戦争を非難するが、自国の領土・国民を守るために自衛戦争を続けているウクライナを非難しない。それはなぜだろうか。それは人々の間に正しい戦争（Just war）と正しくない戦争（Unjust war）の区別が共通意識としてあるからではないだろうか。このように戦争には正しいものと正しくないものが存在するという考えを正戦論という。では何を以って正しい戦争であると言えるだろうか。正戦論者のマイケル・ウォルツァーは主に２つの規定があるという。それは正しい大義と非戦闘員保護である[1]。正しい大義とは自衛戦争を意味する。

本稿では第１節で自衛戦争における核兵器の使用は正しい戦争であるのか、第２節ではなぜ各国が核兵器を保有しているのかについて考察する。そして最後に核兵器廃絶に向けた筆者自身の考えを論ずる。

2　核兵器の使用は正しい戦争？

核兵器はたった１発で戦争の状況を一変するほどの威力を持つ。それゆえ非戦闘員である一般市民にまで被害が及ぶことがある。実際長崎に落とされた原子爆弾は当時、約240,000万人いた人口の約62％におよぶ148,793人を負傷させ、その内73,884人の命を奪った。そして被害に遭った多くの人々が一般市民であった。（ながさきの平和 2021）

核兵器がもたらす問題点はそこにある。核兵器は威力が強すぎるため戦闘員、非戦闘員関係なく被害を与える。

では例えばＡ国とＢ国との戦争において、Ａ国がＢ国へ先制攻撃を与え（これは兵士に向けられた攻撃だとする）、Ｂ国が反撃に核兵器を使う。このＢ国の反撃は正し

いと言えるだろうか。答えは否である。これは身内ないし親しい友人を殺害された人が、殺人を犯した者の家族や友人に対して反撃することが道徳的に許されないことと同様の論理である。殺人犯の家族や友人に何の罪が無いのと同様、A国の一般市民に罪は無い。つまり自衛戦争であっても核兵器の使用は認められないのだ。私たちは誰でも戦争より平和を望まないものはいないのである。

3　なぜ核保有をやめないのか

核兵器はそれ1発で強大な威力を持つが、各国が核保有をやめない。その理由として核抑止としての安全保障のジレンマ問題を挙げることができる。

国際社会には国家における政府が存在せず、国家間を統制するものがない。つまり国際関係は”無政府状態”なのである。そのため国家は自らの身を守るために軍備を増強し有事に備える。そしてある国家が軍備増強したら他の国家もそれに触発されて軍備を増強する。これが安全保障のジレンマの論理である。（吉川 野口 2015）この論理に沿って各国は軍備を増強し、さらには核兵器の開発を進めてきた。

このジレンマにはメリットとデメリットがある。メリットは双方に軍備増強することによって安易に戦争に発展することがないことであり、デメリットは万が一戦争が始まった場合双方が大きな損害を受けてしまうことである。

ではどうしたら核兵器を無くすことができるだろうか。完全に核兵器を廃絶することは難しいかもしれないが、やはり私は核兵器を多く保有している国が率先して減らしていくことが求められていると思う。だが核兵器を保有している国にも言い分はある。もし核兵器を廃絶して、核の抑止力がない状況で戦争に巻き込まれたらどのように反撃することができるだろうかという反論である。

ただそのようなリアリズム的視点による国家間関係は「孤独で、貧しく、不快で、残忍で、しかも短い」（ホッブス 2022：206）のである。

4　おわりに

以上本稿では自衛戦争における核兵器使用が正しい戦争であるのかと安全保障のジレンマによる核保有の問題について論じた。

では核兵器を廃絶するためにはどうすれば良いのだろうか。私たちは実際に戦争を経験した方々から実際に話を聞ける最後の世代である。そして私たちは「唯一の被爆国」である日本という立場からその惨状を国際社会に正しく訴えるが必要である。そしてウォルツァーが言うように核戦争に変わる他の方法を探さなければならないのだ。最後に核なき世界の実現を願い、本稿を終える。

この本稿を78年前に原子爆弾によって被害に遭われた全ての人々へ捧ぐ。

１　ウォルツァーの正戦論の説明は、駒村・鈴木・松元訳 2008aの訳者解題を参照

引用・参考文献

ウォルツァー・マイケル　駒村圭吾・鈴木正彦・松元雅和訳（2008a）『戦争を論ずる－正戦のモラル・リアリティ』風行社

ウォルツァー・マイケル　萩原能久監訳（2008b）『正しい戦争と不正な戦争』風行社

ながさきの平和（2015）「原爆の威力」https://nagasakipeace.jp/search/about_abm/scene/iryoku.html（2023年7月10日にアクセス）

ホッブス・トマス 加藤節訳（2022）『リヴァイアサン　上』筑摩書房

吉川直人・野口和彦編（2015）『国際関係理論 第２編』勁草書房